

「私とは何か」 —池田晶子から考える—

山口大学教育学部 社会科教育選修 4年 伊田 名央人

1. 研究動機

研究のきっかけは、池田晶子の書籍に出会い、自分の中で大きな前提が揺らいだことである。それは「私とは何か」であった。今まで「私」を疑ったことはなく、当然のように思っていた。当然に思っていた理由は、「私は私だ」と自明で捉えていたし、デカルトの「我思う故に我あり」という考えに同意し、「私」だけは確実だと思い込んでいたからだ。だが、確実だと考えていた「私」とは一体何だろうか。本を読んでいく中で“私がこの私であるのはなぜか”が分からなくなった。これが自身に大きな影響を与え、池田晶子が何を言いたかったのか、を明らかにしたいと考えるようになった。

2. 研究方法・研究目的

本論文では、「私とは何か」に焦点を絞り、主に『私とは何か さて死んだのは誰なのか』『魂とは何か さて死んだのは誰なのか』（以下『私とは何か』『魂とは何か』とする）をもとに、彼女の思考過程を追う形で章立てをして思想を考察していく。具体的には、第一章「私とは何か」では、どのようにして池田の問いは始まり、どのように「私」を捉えるようになったのかを述べていく。第二章「魂とは何か」では、池田が「私」を「魂」で捉えるようになったが、そこには長い時間をかけた苦戦があったことについて追っていく。そして、第三章では、池田の考えを踏まえて「私とは何か」、そして、そこから見えてくる「人間とは何か」を考えていく。

3-1. 「私とは何か」 問いの始まり

池田は「私とは何か」と“私”を問うのではなく、「私とは何か」と今まさに問っている「これ」、これが一体何なのかが常に不思議であり、これが問いの始まりであった。「これ」とは脳や DNA、肉体だと答えても、そう答えているところの「これ」、これは何なのかが解消されないで、答えたことにはならない。池田は「これ」に対して、初めは「意識」という語で捉えようとしたが、それでは違和感が解消されず、「魂」という語で捉えようとした。以下、具体的に述べていく。（『私とは何か』 p10-12）

3-2. 「私とは何か」 「意識」という語で捉える

まず、「これ」（＝意識）は何ものでもあり得ないし、誰でもないとした。また、デカルトや世間は、本当は何ものでもあり得ない「これ」を「私」という何者かであるような言葉に置き換えたと言及し、それは名指すためにくっつけたものに過ぎないとした。「私」という語は「これ」（＝意識）の置き換えである以上、「私」に本質があるのではなく「これ」（＝意識）に本質があると考えたと言える。だからこそ、池田は「私」という存在は「意識」で捉えられると考えた。（『私とは何か』 p12）だが、その後「意識」という語に違和感を覚える。「私とは私の意識」であるという捉え方だと、今まさに「私とは私の意識だ」と言っているこれは何か、が解消されないからだ。また、多くの人が、私が私であるのは「私の意識」だということに気付いて違和感を強めた。皆が揃って口にすることは、この私が私である理由になり得ない。そこから、私が私である根拠を、誰でもないから誰でもあるような「意識」ではなく「魂」に求めた。（『私とは何か』

3-3. 「私とは何か」 「魂」という語で捉える

「魂」という語でどのように捉えたか。池田は、「意識」を「地」、「魂」を「図」と捉えた。（『魂とは何か』 p33）地と図の関係とは、図1が分かりやすい。図1をみて、人の顔が見えたらそれを「図」といい、黒の背景を「地」と呼ぶ。（逆に杯が見えたらそれが図で、白の背景が地）『デジタル大辞泉』によれば、心理学で、ある物が他の物を背景として全体の中から浮き上がって明瞭に知覚されるとき、前者を図といい、背景に退く物を地という、とある。そして、この関係において、地のない図は存在しない。地があってこそその図であることから、「意識」があってこそ「魂」が成立すると考えたと言える。その後、魂それ自体について様々に考え出すのだが、語り出そうとして、絶句し、それが何なのかが分からないと述べた。その原因は、「魂」自体が論理で語ることを我々に要請していないのに、我々が論理で語ろうとするからであった。（『魂とは何か』 p47）また、池田は「魂」という語による捉え方によって、「魂」をもって「人間」とする理由はなくなり、人間も動植物も等しく、同じ自然の「魂」と捉えていた。（『私とは何か』 p14-15）



図1

4-1. 「魂とは何か」 魂を考える

池田は「魂」を見究めていくのだが、どうしても論理で語ってしまうことに苦戦する。だが、そんな中でも、直感的に「魂の視点」というものに向かおうとする。「魂の視点」とは、後に詳しく記述するが、魂が全てにおいて先立ち、一切の分離がなく全てを包摂し、全現象は魂において成立するというものである。だが、それは一時的であり、いつの間にか論理で語ってしまうし、語るしかなかった。では、「魂」それ自体をどのように見究めたか。特に重要だと思われる箇所を見てみたい。池田は「すべてを認識する誰でもない意識が、にもかかわらず誰かでない〈私〉であるのは、それが、〈魂〉だからである」（『魂とは何か』 p11）と述べた。“それ”とは「すべてを認識する誰でもない意識」のことである。「意識」が「魂」だから、本来誰でもない意識が、それにも関わらず誰かでないこの「私」をやっているのだ。ここでは、「意識」と「魂」を同一に捉えているところから、分離がなく全てを包摂する「魂の視点」を見たと言える。だが、既に論理で語っている以上、一時的に論理を離れ、直感的に「魂の視点」を見たにすぎないのであった。そして、「魂」と聞くと、どうしても“在るか無いか”が当然疑問として湧くが、池田は在るか無いかではないと答えた。（『魂とは何か』 p18-19）というのも、「ある人がその人であるところのそれ」を「魂」と呼んでいるのであって、既に「ある人がその人である」という同一性は十分に説明できるからだ。故に、それ以上の意味の付け加え（魂は浮遊物、靈魂などと想像すること）は不要だとした。

このようにして、「魂」について「考える」ことを続けていたが、何かを「考える」ということは何かを「感じる」ことから始まるとし、「感じる」を大切にしていこうになる。そして、「感じる」と聞くと、非合理的で感情的な印象があるが、池田の「感じる」にはいい加減さがない。それは、哲学的な論理の限界を見据えつつ、未だ知らぬ、まったく違った、「感覚の論理」で進む行為であった。そうして、論理の先を行こうと、「感じる」を大切にしていこうになった。（『魂とは何か』 p24-26）

4-2. 「魂とは何か」 〈私〉の気配

では、「感じる」機能を用いるとどのようなことが起きるのか。これまで常に「私」が不思議でしかなか

った池田は、次第に「私」はそれほど特別ではないのではないかと感じるようになった。どのようにしてそう感じたのか。まず、「私」を「考える」以前の「感じられて」いるところの「〈私〉の気配」に重心を移していった。そうすると、「魂の〈私〉」になるという。(『魂とは何か』 p27-28)「魂の〈私〉」とは、「魂」が「私」に先立っていて、「魂」が「私」を包摂している状態を指す。一見「魂の視点」で語っているようにみえるが、既に論理で語っており、直感的に捉えたに過ぎない。そして「魂の〈私〉」になると、誰でもない「魂」になってしまい、それが「私」に特別性を感じさせないのであるが、それはなぜか。論理で語っていることも一因だが、「魂の視点」から分離が起こっているからだと考察した。「魂の視点」を直感的に捉えたもののその後、論理で語るようになったので「魂」が「地」、「私」が「凶」に分離したのだ。以前、「意識」を「地」、「魂」を「凶」としたが、その際の「地」にあたる「意識」とは誰でもなかった。一方「魂の〈私〉」では「私」の特別性を顕すものであったはずだが、「魂」を論理で語ることにより、「魂」が「地」になり、「意識」と同じように誰でもなくなってしまうのではないかと考察した。このようにして、「〈私〉の気配」、「魂」に重心を移すと、誰でもない魂になってしまい、「私」に特別性を感じさせないのでないかと考察した。そして、池田がまだ論理で語っている以上、「私とは何か」という問いは解決しない。「魂の〈私〉」とは、誰でもない魂における〈私〉である。誰でもない魂において私が私であるとは一体どういうことか。また、「魂の〈私〉」と言っているのは一体誰なのか。故に、「私」の独自性を指せずに「私とは何か」と振出しに戻ってしまうのだ。(『魂とは何か』 p28)

4-3. 「魂とは何か」 魂の私 —魂の体質—

未だ論理で語ってしまう池田だが、「魂の視点」に一層向かおうとする。そして「魂の視点」から見ると多くのことが明らかに理解できるようになると述べた。具体的に何が見えたか。主に3つに整理した。1つ目は、〈魂の体質〉である。〈魂の体質〉とは、「人物」の初期条件を指す。池田を例にすれば、「ものごとを原理的に考えることを好むとか、普遍的な事柄にしか興味が向かない」(『魂とは何か』 p39)を指す。池田はこれに対して、特に教育された覚えはなく、気がついたらそうだったと述べ、だからこそ謎だと述べた。そして、何故そのような感じ方なのかを明らかにしたかったが、その謎は問い得るのかと疑問を持つ。その後、池田は問うことを止め、“そういう魂だ”と理解するようになる。「なぜ」と問うのではなく、そのような振る舞いこそが魂なのだとして理解するようになった。〈魂の体質〉はなぜそうなのか理解できないと理解する、まさにそのことによって理解できるのだ。(『魂とは何か』 p37-43)だが、これでは何も言ったことにもなっていない。理解できないと割り切るそのことによって、分かったつもりになり、再び論理で語り出している。これでは「魂の視点」に立ったとは言えないのではないかと考察した。

4-4. 「魂とは何か」 魂の私 —すべてを包摂する魂—

「魂の視点」から見ると理解できることの2つ目は、「魂」はすべてを包摂しているである。池田は、すべてを包摂する「魂」について、精神と肉体も分離されず、先天性と後天性も分離されず、運命も自由意志も、どちらの考え方も可能だと述べた。勿論、そこには「意識」や「私」も含まれ、本当に全てを含み、全てにおいて先立ち、分離がないとした。そうして、性格や気質などの〈魂の体質〉をはじめとする全てが包摂されている“それ”が“その人”であるから、そこに独自性があると思ったのだ。思ったのだが、ここでもまた論理で語ってしまっている。それは、「魂の視点」に向かおうとすればするほど、遠のいていくようであった。遂にある人の独自性を指すことができると思ったが、ここでも指すことが出来なかったのではな

いかと考察した。(『魂とは何か』 p213)

4-5. 「魂とは何か」 魂の私 —全現象は魂において成立する—

「魂の視点」に立つと理解できることの3つ目は、全現象は魂において成立するということである。池田は、ここでも思考を広げていくが、やはり「私とは何か」という最初の問いに戻ってしまう。「感じる」という機能でも、いつの間にか論理で語ってしまい、「魂の視点」に辿り着かない。池田は苦戦しながらも、その後、「魂の視点」の可能性に気が始めた。そして、それは「私とは何か」という究極的な問いに対して有効であると考えた。そして、少しずつ魂の方向にシフトしてみると、思考される以前の眩きようなもの、感触、気配、誰とも何ともつかないような事柄の一切が包摂されるようで、一切は、魂においてこそ成立しているようだと言った。続けて、私の内に魂はなく、魂の内に私があるとした。しかし、なぜ魂において全現象が成立するのかは分からない。特に、魂において私が成立するとはどういうことなのか。しかし、直感的に「魂の視点」を捉えたここでの池田は“そういうものだ”と、もはや理解できないと理解することによって理解をした。だが、今まさにそうして論理で語ってしまっているのが、謎が残ってしまうのである。(『魂とは何か』 p236-240)

これまで3つに整理してきたが、池田は本当のところは「魂の視点」に立てずにいつの間にか論理で語っていると考察してきた。それは、「魂の視点」に向かおうとすればするほど、それが遠のいていくようであった。そして、最後には、「魂」は語り出したと述べ、「魂」こそが原点であり、そこに全て詰め込まれていて、全ては「魂」から始まると締めた。(『魂とは何か』 p248-249)

5-1. 池田の論考を踏まえての考察 「私とは何か」

結局のところ「私」とは一体何なのか。仮に形式(言葉)に過ぎないと言え、そう言っているは誰かになってしまう。では、視点を変えて、我々は何故こんなにも「私」に執着するのか。それは、不安の裏返しではないだろうか。その不安は、我々人間が他者にはない独自性を求めることから生じ、「誰でもない誰か」になりたがっているからだと考えられる。今「他者」と言ったが、本当に「他者」はいるのか。池田の全現象は「魂」において成立するという考えを借りるなら、「他者」という区別をしているのは「私」ではないだろうか。そうして区別してしまう理由は、「分からないもの分かってほしい」という根源的欲求があるからだと考えられる。我々は、目に映る世界を言葉によって分節することで理解したいのだ。その過程で「他者」という区別が発生したのではないか。また、「魂」が「人間」をやっている、それと同時に「自己意識」を有しているからだとも考えられる。それを持っているがために、目の前に映る世界において自身が「何者でもない」という状態は不安定だと考え、目の前の区別できそうな自分と同じ見た目をしたものを「他者」と区別し、「私」と発語することで思い込みでもいいので「誰か」になりたいのではないだろうか。だが、これまで当然のように用いてきた「私」や「他者」、「人間」という言葉はどこからやって来たのか。恐らく“どこから”というより、気づいたらそこにあった。では、なぜ何も疑わず当然のように使うのか。それは、日常生活に没頭し、疑いを抱かない人間らしさが理由ではないか。我々は言葉を使うことで理解した気になり、それに頼らざるを得ない存在となったと考えられる。

我々は「魂」において「私」や「肉体」、「自己意識」といった様々な形式や機能をやっているが、「私」とは形式ではないように、それぞれの意味するところは形式や機能ではない。では、それらは何なのか。そして、なぜ「魂」はそれらをやっているのか。それらが何を意味するのかという疑問と、この「魂」と

「魂」における諸物の結合の不思議は分かりえない。やはり、それは論理で語っているから分からないのであろう。

これまで「私とは何か」について述べてきたが、それが問いになるのは我々が「人間」だからだ。池田は人間と動植物を同じ自然の「魂」だと一元的に捉えたが、一緒くたに出来るほど「人間」は単純な存在ではないのではないか。「人間」には「自己意識」があり、それを支える「言語」と「理性」を持っているからだ。但し、そのような動植物にはないものがあるからといって、人間を特別視する必要はない。単に人間がそうであるだけである。だが、複雑な存在であることは確かに言える。そんな「人間」において「魂の視点」で語ることは可能だろうか。

5-2. 池田の論考を踏まえての考察 人間は「魂の視点」で語ることはできるのか

率直なところ、我々人間は「魂の視点」に立って語ることは無理ではないだろうか。なぜなら、語るとは論理であるからだ。では、今までの池田の論考は何だったのか。結局のところ、「私」の独自性を指す為の論理になってしまっている。池田も人間である以上、「私」の独自性を指すことで安堵したかったのではないだろうか。やはり「人間」は論理を手放せないのだ。では、論理で生きるしかない我々人間には「何が」できるのだろうか。我々には「魂の視点」に限りなく近いことであればできるのではないだろうか。具体的には、「なぜ」や「なんだろう」と論理を働かせたくなる事柄に対して「そういうものだ」と割り切る“癖”を自身に付けるのだ。例えば、「私とは何か」と問いを立てて思考を進めるのではなく、「私とは“私とは何か”と問いを立て考えてみても分かり得ないほど奥が深いものなんだ」と理解できないと理解することで理解していくのである。そうすることでこれ以上分離が起こらず、最低限の分離状態で済むし、色々悩むことなく、より自由に且つ生きやすくなるのではないか。だが、人間は論理で生きている以上、再び論理で語り出してしまふ。それでも、長時間悩んだりするより善いのではないだろうか。何も解決していないが、柔軟的で自由に生きることができれば、複雑で矛盾ばかりの「人間」をうまくやっていけるはずだ。

しかし、「なぜ」と問いたくなるものを割り切ることで自由になるのはその意味では善いが、ある種の“諦め”であるという点では善くない。日常生活レベルの“分からないもの”（理解不能）に対しては割り切っても善いだろうが、「私とは何か」という人間の根本を問うような“分からないもの”を割り切ることは善くない。割り切れればいいと簡単に言ったが、これが非常に困難であることは深いところで感じている。ではどうすればいいのか。このままだと、本論文のテーマである「私とは何か」と「人間とは何か」という重要な問いが割り切りで終わってしまう。では、問い続けるのがいいのか。だが、ここでも「私」や「人間」を問い続ければいいんだと、どうして割り切れてしまう。何か結論を出す度に、割り切りになってしまう。この状態、これだけはどうも「割り切り」ができない。今までの自分の主張は「分からないもの・割り切れないもの」を割り切れればいいと「分かったつもり・割り切ったつもり」になっていたのではないか。我々の「割り切り」はどこまでいっても「理性」が行っている。つまり、どこまでいっても我々人間に「魂の視点」を自分のものにすることが出来ないし、そもそも「魂の視点」は自分のものにしないのではないか。しかし、そうであるからこそ、壁が破れる「瞬間」というものがある。理性や論理では割り切れない、語れないという壁を目の当たりにしたその刹那に開けてくるのが「魂の視点」ではないだろうか。だが、「魂の視点」に“立つ”ことは難しい。一瞬でも「魂の視点」が開けるということは、我々は元々それに立っているのであろう。だが、普段それが理性や論理によって隠されているからこそ“立つ”ことが難し

い。しかし、覆い隠されているからこそ、それが顕在化した際に、理性や論理では気づき得ない“何か”を捉えることができるのではないだろうか。

どうやら我々人間は〈意識の視点〉を脱することが出来ないのにも関わらず、実は常に「魂の視点」に立っていると考えられる。それは矛盾である。だが、そうして矛盾だと捉えてしまうのは〈意識の視点〉から脱せていないからだ。“矛盾”を理性によって考えていき、どうしようもなくなる大きな壁を目の当たりにしたその瞬間に、驚きが起こり、矛盾云々が消え、“何か”が露になってくるのではないだろうか。だが、すぐに〈意識の視点〉に帰ることになるので矛盾に戻ってしまう。我々人間にとって「魂の視点」は以上のような行為を通して露わになる他ないのではないだろうか。

参考文献

池田晶子. (2009). 魂とは何か さて死んだのは誰か. トランスビュー.

池田晶子. (2009). 私とは何か さて死んだのは誰か. 講談社.

池田晶子. (2010). 残酷人生論. 毎日新聞社.